

東北の染織文化にみる被衣の受容と展開 1

—— 芹沢銈介コレクション 庄内被衣 ——

奈 良 綾

1. は じ め に

被衣とは、女性が外出時に着物を被る風習、もしくは被る着物そのものを示す言葉である。平安時代後期頃、女性が外出する際、顔を隠すために着物を被ったことが起源とされる。女性はむやみに顔を顯にしないことを常としたこの時代、牛車を使用できない中流以上の女性は笠や着物を被った。この風習は江戸や京都で江戸後期まで、また伝播した地方では昭和の初期まで見られたという。

被衣の読みは「かつぎ」「かづき」「かずき」と様々である。読みに関しては地方によって異なり、染色家で染織研究家の岡村吉右衛門は、「関東では「かずき」と呼ぶが、関西では「かつぎ」となる。被衣の文字が何時頃から文献に載り始めたかは知らないが、「かずき」は「かずきぬ」のつづまった言葉であろう。かずくというのは、頭に物を載せるとか、被ると言う意味の古い言葉になるし、「かつぎ」は担ぎ衣となるやもしれない」と述べている¹⁾。

被衣を所蔵している美術館等でも読みが様々であるが、東京の日本民藝館と静岡市立芹沢銈介美術館では「かづき」と読んでいる。一方、被衣が多く発見されている山形県庄内地方の致道博物館（被衣6点所蔵）において調査したところ、この地域では「かつぎ」と呼んでいることが判明した²⁾。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の収蔵品にも芹沢コレクションとして被衣が含まれているが、その読みは庄内地方の呼び方に合わせ「かつぎ」としている。庄内地方の読みは岡村が指摘する関西と同じ読みとなり、庄内地方と関西の都である京都のつながりは、被衣が地方に伝播するに至っての関係性からも興味深い。

1937年頃、民芸運動の創始者柳宗悦が館長を務める日本民藝館に被衣が持ち込まれたことが、被衣の収集や調査保存が行われる契機となった。柳が集めた被衣を見に民芸運動の同志が民藝館を訪れたのだが、その中に芹沢の姿があった。その時柳は庄内から収集されたという被衣を、京都の絹物で繊細な柄の被衣と区別し「庄内被衣」と命名したという³⁾。

当時、柳と親しかった吉田正太郎との間に交わされた書簡に被衣のことが記されている。「君から贈って頂いた米澤地方（山形県）の着物が縁で、あれから同種のもの中々澤山集まりました、あれは「かつぎ」と呼び山形懸から秋田懸にかけてある様子です、もう少し集めたら一度展覧催したき意向です（括弧内筆者）」（吉田正太郎宛 柳宗悦書簡 1937年8月24日）

この他にも同年9月2日、1938年1月11日、同年2月1日と柳は約半年の間に被衣について収集・調査したことを吉田に知らせており、更に他の友人にも被衣購入を報告している手紙が残されている⁹⁾。柳がそれほど執心した被衣を、柳と似た審美眼をもつ芹沢は見た途端強く惹かれたのであろう。この後に芹沢が集めた被衣は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に14点（うち芹沢銈介収集4点、銈介長男芹沢長介収集10点）、静岡市立芹沢銈介美術館に10点収蔵されている。

芹沢コレクションの被衣は、日本民藝館と同じように東北、特に山形県庄内地方を中心に発見、蒐集されたものである。多くは藍で染めた麻地の着物で、型付けされた小紋や中形、糊を搾り出して描く筒描で文様がつけられている。藍地に繊細な型の文様と伸びやかに描かれた筒描の文様で構成される被衣の意匠は、大胆で斬新である。顔を隠すという奥ゆかしい風習に用いる着物でありながら、意匠に筋が一本通ったような強さを感じる。

これらが用いられたとされる庄内地方では、この風習が見られなくなって60年以上が経過しているが、現在も主要な研究に着手されていない。被衣については古書や古辞書類に記述されることが多いが、昭和20年以降に刊行された書物には簡約にしか触れられておらず、服飾史においても一般の着物の変遷に被衣の存在はない。被衣はあくまで付属物として考えられていたために関心を持たれなかったと考えられる。しかし日本美術史に残る有名な絵巻物や近世初期風俗画を見ると、被衣の女性達が数多く描かれており、その時代における被衣の流行をみる事が出来るのである。それらを元に日本における被衣の使用形態を把握し、東北で用いられ残された被衣、芹沢銈介コレクションの被衣を精査することで、京文化を受容した東北の染織文化がどのように展開したか探ることにしたい。

2. 被衣の系譜

ここでは女性が外出する際、顔を隠すために着物を被ったという被衣の風習の始原と変遷を、古書と各時代の風俗画から探る。

(1) 被衣の始原 市女笠から袷被衣まで（平安中期～鎌倉時代）

被衣本来の風習としては、身分の高い女性がむやみに顔を顕にしないよう隠したことに始まるが、それ以前に行われていた「被る」という行為を含めて考察すると、平安時代初期、外出時に市女笠を使用する女性に被衣の始原がある。市女笠とは頂部に高い巾子を造作した笠の一種で、市に物を売りに出かける身分の低い市女が日よけのために被るものだった。平安時代の市女笠は周縁部が大きく、肩や背を覆うほどのもので、主に陽をさえぎるものとして用いられた。鎌倉時代に入ると周縁部は小さく、頂部は浅くなるが、この頃から働く女性の日よけの用途から、被衣本来の目的に近い外出の際に顔を隠す意が強くなったと思われる。また装飾性も重視され、中流の女性も笠を用いるようになり使用範囲の拡大がみられる。

平安中期になると、この市女笠は上記した笠の形の他に、^{むし たれぎぬ} 杓の垂衣とよばれる被りものが見られるようになる⁵⁾。これは市女笠の縁に、薄い布をひとまわりカーテンのように縫い付けたものをいい、周りの布は取り外しが可能で持ち運びに適している特徴をもつ⁶⁾。

杓の垂衣が流行した背景に、平安後期から鎌倉時代にかけて興った仏教の浸透があげられる。この時期は道が整備されて交通の便が良くなったことにより、寺社への女性参詣者が増加した。これに伴い、その旅姿として馬や徒歩で外出する女性が粉塵除けを備えた顔を隠すものとして、杓の垂衣を用いるようになったのである。市女笠の変遷からみると後者の杓の垂衣が被衣の前身と考えてよいだろう。

一方、市女笠や杓の垂衣が流行した同時期、着物そのものを被る女性が現れる。女性が着物を被る姿を描いた現存する最古の資料は、平安末期に描かれた国宝「扇面法華経冊子 巻7 扇 21 市場図」[図1]⁷⁾ (1152年頃⁸⁾ 四天王寺所蔵)と思われる⁹⁾。

ここでは笠や杓の垂衣を用いる女性よりもやや身分が高い女性が、当時^{うちぎ} 桂とよばれた着物を被る姿がみられる。桂は平安中期に女性の正装時の十二単の一部として、平安後期から鎌倉時代には上着として用いられたものである¹⁰⁾。

また「年中行事絵巻」(1165年前後 住吉家模本 田中家所蔵)¹¹⁾ には、射遣^{いのこし}の場面で桂被衣の姿が描かれている。ここでは桂を被り、手

袖に通しているが、前述した「扇面法華経冊子」

下絵に描かれた女性は袖を通していない。およそ同時期に描かれた作品であるが、桂を被るスタイルに違いがみられる。ただし、これ以外の鎌倉時代までに描かれた作品の桂被衣姿はほぼ袖を通す着こなしであることから、後者が主流であったと考える。

この桂を被る着こなしは、被ったままの姿と歩き易いように腰のあたりで赤い紐をからげた姿の2通りみられる。後者の紐をからげた着こなしの上に市女笠を被った女性もいたが、その姿は壺の形に似ていたことから壺装束とよばれていた。

次のような壺装束の女性の振る舞いについて苦言を述べた文学作品もある。

紫式部『源氏物語』葵の巻¹²⁾では「壺装束などという姿にて女房の賤しからぬや(中略)物見に出でたる例はあながちなりや」と、壺装束姿の女性をみっともないと記し、清少納言『枕草子』¹³⁾では「見苦しきもの」の中に「壺装束したる者の、急ぎて歩み着たる」と記している。

被衣について記された文献の中で、最も古いものとされているのは『東北院職人歌合』と考えられる¹⁴⁾。この中の六番(深草)で歌われるこの和歌に「かづき」の文字が記されている。

「月ゆへに 内へもいらて とにたては やうの者とや 人の見らん

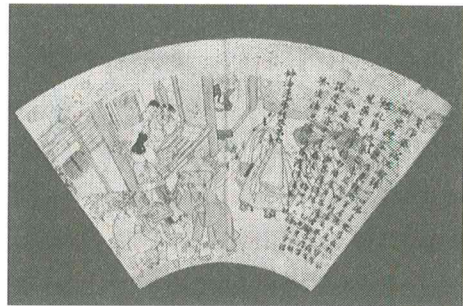


図1⁷⁾ 国宝「扇面法華経冊子」
(四天王寺所蔵)

ひとめみし かわらけ色¹⁵⁾の きぬかづき 我に契や 深草の里¹⁶⁾ (傍線筆者)

『東北院職人歌合』とは中世に詠作された現存の職人歌合の中で最古ものとされ、序文によると1214(建保2)年東北院の十三夜の念仏の集まりで催された歌合の記録とある。また無住道暁『沙石集』(1283年)に「清水へ常に詣ける女、示現をかうむりて傍の屏風に白き衣をうちかけて有けるをば落してうちかづき、やがて下向すとあり、また小童も女の如く衣かづきしいたり、古画にみゆ、今も牛若丸五郎が体を画くに白き衣をかづけるも是なり女に紛れて出立のみにはあらず」(傍線筆者)と書かれていることが『存採叢書 嬉遊笑覧』¹⁷⁾に記されている。ここでは女性が白い着物を被っている姿が記され、また牛若丸が着物を被った有名な場面を例に挙げている。

13世紀にはいると、被衣の使用範囲が公家に仕える女房から中流階級程度の身分までやや広まったと考えられる。「住吉物語絵巻」(13世紀後半 静嘉堂文庫所蔵)¹⁸⁾の場面で、嵯峨野に遊ぶ姫君と着物を被く女房たちの様子が牛車とともに描かれている。着物丈はこれまで見てきたものより比較的長めで、白緑色に紅梅模様、白地に銀の桜模様など入っていることから高価な桂と思われ、女房の中でも高位の人々と判断できる。

さらに時代が下がると、参詣のために地方から集まった人々を描いた法眼円伊「一遍上人絵伝」[図2](1299年 清浄光寺所蔵)¹⁹⁾に被衣姿の女性を数多く見ることができる。その中の「第6巻第2段 三島大社参詣」の場面に、市女笠、桂被衣(壺装束)、杓の垂衣を用いる女性達が描かれており、13世紀後半にはこれらが同時期に使用されていたことが分かるのである。

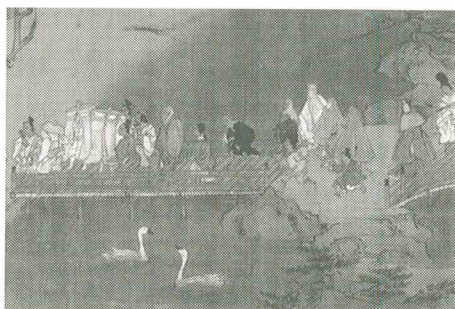


図2¹⁹⁾ 「一遍上人絵伝」第6巻第2段(部分)
(清浄光寺所蔵)

(2) 小袖被衣から被衣へ(室町時代～江戸時代)

安土・桃山時代に入ると、市女笠は頂部の先端を尖らせ装飾を施すようになった。形は変化しても、平安時代の壺装束同様、着物を被った上に市女笠を被る姿も見られた。しかしこれ以後、竹や桧の剝片を組んで紙を貼り、黒漆を塗った塗笠へと代わる。また江戸時代に入ると、笠を被る行為が顔を隠すという被衣の風習の意から離れ、これまでの市女笠と被衣のつながりが薄れていった。

一方、桂被衣は、鎌倉時代まで公家に仕える女房や中流階級の一部という限られた女性のみ用いることが出来たが、室町時代に入ると、小袖を被衣として用いる女性の姿が風俗画に若干みられるようになる。これは小袖着用が一般化し、小袖を手に入れ易くなったことが小袖被衣の流行の発端となったと思われる。小袖の名は大袖の装束類に対し、袖の細い內衣という意からきていて、平安時代では装束の一番下に着る肌着として使用していたという²⁰⁾。小袖が下着から表層化し、それが確立したのが室町時代の初めにあたる²¹⁾。

「桑実寺縁起」(1533年 桑実寺所蔵)²³⁾ 七光寺の法会の場面に、華やかな文様の入った華やかな被衣を袖を通したまま被る高貴な女性、違う場面には文様のない桂被衣を袖を通さずに被る中流階級と思われる女性の姿が見られる。同じ物語に桂と小袖被衣の両方が描かれていることから、この作品が描かれた時期が、被衣に用いる着物が桂から小袖へ代わる転換期であったことが推測されるのである。

これまでは絵巻物を中心に検証してきたが、16世紀は屏風絵が多く描かれた時期であり、これらからも数多くの被衣姿の女性を見ることが出来る。「月次風俗図」(中世末期 東京国立博物館所蔵)²⁴⁾に描かれた女性たちは、皆小袖を袖を通さず被っており、頭に掛けた小袖の襟の部分を手で押さえながら歩く姿も見られる。小袖被衣の上に笠を被ったり、黒い塗笠を用いる女性が一部見られるが、これは室町時代以降の特徴といえよう。この頃から、壺装束のように裾を紐でからげることとはなくなるが、おそらく被る着物の身丈の長さが短くなったことが、紐を用いなくなった理由と思われる。

江戸期に入ると被衣の仕立てに大きな変化がみられる。安土・桃山時代になると、それまで主流の髪型であった後ろに垂らした垂髪や下げ髪から、徐々に結び上げられるようになった。江戸期には公家や武家の女性を除いて、女歌舞伎や遊女などが兵庫髷や島田髷、勝山髷を結び始め、その後一般庶民までその髪型がおよんだという²⁵⁾。明和期(1764-1772)に婦人専用の「女かみゆい」という職業の誕生したことも、結髪が庶民に定着したことを示している。また安部玉腕子『当世かもじ雛形』1779年²⁶⁾という26種の髪型が掲載された書物も刊行され、それに伴い髪を飾る頭飾品も発達した。結髪のために油を使用したことは髷の複雑化を可能にし、頭飾品の発達にともない髪型の大型化につながった。そのため小袖被衣では被りにくくなったため、襟を付ける位置を変えるという改良(襟の仕立ての詳細については次章に記述)を余儀なくされた。被衣仕立ての変化は、当時流行した髪型が改良の要因であり、被りやすさを求めた結果であった。この仕立ての変化の有無は、現在調査していく上で、現存する被衣の使用時期をおよそ1750年前後で判断できるという基準にもなるのである。

この時代は被衣の風習の意義が「顔を隠す」以外に「埃よけ」が加わるのも特徴である。鬢付け油の使用は髪型の複雑化、華美をもたらしたが、油のついた髪は砂埃が付きやすくなった。被衣は外出時の塵よけとしても用いられたのである。当時、被衣の使用理由は顔を隠すことから髪

の塵よけに移行していたと考えられる。

(3) 江戸・京都における被衣の衰退と地方への伝播(江戸中期～昭和)

1650年以降、江戸では被衣を用いる女性が減少するが、その原因は承応事件と明暦の大火にあると考えられる。

神田白童子「雑話筆記」(1730年)²⁷⁾には「承久年中(1652-1655)までは、江戸の女も京女の如く、物語には被と云ふものをかぶりしと也、然るに承応年中○元年増上寺に於て崇源院殿○徳川秀忠妻

の為に、万部の御修行ありし折節、戸次庄左衛門、林戸右衛門、藤江又三郎など云浪人、芝札の辻邊に住し、万部の節、かづきをかむり参詣に紛れて、時の老中松平伊豆守信綱を窺ひし所に、事顯はれて皆々誅せられたり(略)」と記されている。これは1652(承応元)年9月、浪人による老中暗殺計画が発覚し処刑された事件を指す²⁸⁾。また、新見正朝「八十翁昔話」1732年に「明暦(1655-1658)の此迄は、針めう、腰元、被衣いただきてありきし。万治(1658-1661)の此、江戸中かつぎ止む。酉の年(1657 明暦3年丁酉)大火事以後、女かちにてありく時、ふく面の上に、玉ぶちといふあみ笠をかぶし。…(略)」²⁹⁾と記されている。(傍線筆者)

前述の承応事件でおそらく被衣の使用に何らかの規制が行われ³⁰⁾、更に大火が重なったことにより江戸で被衣を用いる女性が激減したと推測される。

当時、被衣に変わる髷の埃よけとして、綿帽子³¹⁾が用いられ始めたことが被衣の衰退に拍車をかけた。その後は揚帽子³²⁾へと代わり、江戸では18世紀初頭には被衣姿が見られなくなる。京都においては、長沢芦雪「東山名所図」(1778年 所蔵者無記載)³⁴⁾に被衣姿の女性が描かれているため、18世紀末までは風習として残っていたと推測される。

この時期は都を中心に行われていた被衣の風習が地方へと伝播した時期にあたる。幕府が出羽国幕領米を江戸・大坂へ回漕させるため、1672(寛文2)年酒田港を寄港とする西廻り航路が開かれた。日本海沿岸の港を寄港する海運は米や紅花という特産物を都へ届けた後、空の船に京文化の調度品や衣類を積み、庄内へ戻ったという。被衣も京被衣そのものが運び込まれたが、需要が多く古着では間に合わなくなり、やがて地元でも染められるようになった³⁵⁾。北前船が調度品だけではなく、被衣という京文化を庄内にもたらし、さらに近隣の文化をも変える契機となった時代である。

19世紀に入ると、都において被衣の風習がほぼ見られなくなったと考えられる。しかし一部の地方では、外出時ではなく、婚礼や葬儀の際に着物を被るという風習の形として残り、全国に点在した。聞き書き調査によると、山形県置賜地方では婚礼時には白無垢、葬儀には縮緬や縹子の被衣を大正時代頃まで用いたという。一方、新潟県北魚沼郡では嫁入りにこれを持参し、敷居をまたぐ時に頭からすっぽりと被るのであるから、決して喪服ではないと記したものも残されている³⁶⁾。また、沖縄県にはシルチョーと呼ばれる芭蕉布の着物があり、首里では白無地のものを花嫁行列に参列する女性が着用し、それを葬儀の際にも被衣として用いた³⁷⁾という記述も見られる。1939年頃、沖縄の葬列を撮影した写真に被衣を被る女性の姿が写っている³⁸⁾が、やはり用いているのは白地、もしくは無地の被衣であるため、芹沢の蒐集した藍染の被衣とは異なる。

一方、藍染の被衣は青森県野辺地町で被衣(町被衣)を用いた婚礼の様子³⁹⁾、また葬儀に用いた被衣が描かれた資料「青森函館画談」1891年⁴⁰⁾に見ることができる。また東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に所蔵されている被衣の中にも、岩手県で収集された被衣があることから、京の被衣が庄内へ伝わり、近隣にも伝播したことがうかがえるのである。しかし山形県庄内・置賜地方においては、昭和初期頃までこの風習が見られたが、現在は行われていないことから被衣そのもの

が処分されてしまい、ほとんど残されていないことが調査によって判明した。

前述したように、柳が藍による筒描や型染の被衣を蒐集地とされた庄内の地名をとって名付けたことから、現在これらの資料が「庄内被衣」と呼ばれ、周知されるようになってきた。そのため「庄内被衣」の意匠が庄内地方独自のものであると思う人も少なくない。しかし西川祐信⁴¹⁾筆「宮詣図」[図3](フリーア美術館所蔵)⁴²⁾に描かれた女性が被る被衣は、「山桜大紋雲に木瓜文裾松菱取に蕨真向兎文被衣」[図4](静岡市立芹沢銈介美術館所蔵)に文様構成が似ている。これらの他にも、絵画資料と現存する被衣の文様の類似が見られることから、「庄内被衣」と呼ばれている被衣の文様は京都から入ってきたものといえる。

一方、江戸で活躍した浮世絵師鈴木春信⁴³⁾筆「雨」[図5](1766年 所蔵者不明)⁴⁴⁾には、傘をさしてもらう女性の被衣に、菊の大紋と霞が組み合わせられる構図を見ることが出来る。これは「菊大紋に霞に梅花文被衣」[図6](日本民藝館所蔵)と酷似しており、京都の被衣意匠が江戸にも伝わったと想像される。

特に「宮詣図」[図3]については、宮詣という庶民の風習を題材に描いていることから、その当時被衣の風習が普通の生活の中にあり、藍染の大紋被衣は18世紀末から19世紀初頭にかけて京都で用いられていたことがこの資料からわかるのである。



図3⁴²⁾ 西川祐信「宮詣図」
(フリーア美術館所蔵)

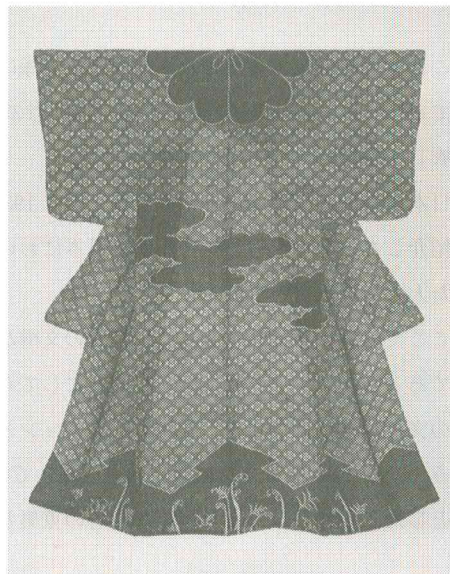


図4 「山桜大紋雲に木瓜文裾松菱取に蕨真向
兎文被衣」(静岡市立芹沢銈介美術館所蔵)



図5⁴⁶⁾ 鈴木春信「雨」(所蔵者不明)



図6 「菊大紋に霞に梅花文被衣」
(日本民藝館所蔵)

3. 被衣意匠の分類

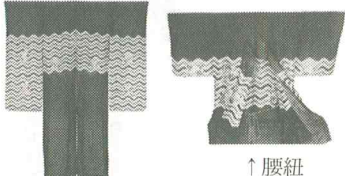

これまでに各地で蒐集された被衣は、文様による分類をすることが出来る。被衣コレクターとしても知られる吉川観方⁴⁵⁾は蒐集した45点の被衣資料を「御所被衣」「町被衣」「布被衣」「大紋被衣」「祝儀被衣」の5種に分類した⁴⁷⁾。

日本民藝館の柳が初めて被衣を見たのは1936年頃である。1936年に自身の被衣コレクションを紹介した書籍を発行した吉川が、日本において初めて被衣資料に注目し、まとめて蒐集、紹介した人といえるだろう。

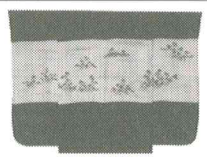

ここでは、前章で述べたように被衣の文様が京都から伝わったことをふまえ、被衣蒐集の先駆けである吉川コレクションの分類を元にして考察を行う。さらにこれまで確認できた現存する被衣の文様構成や仕立てを、吉川コレクションと比較し、それぞれの特徴を見出した上で再分類を行う。(吉川コレクションは蒐集地を記載していないため特定が難しいが、吉川氏が京都を活動拠点としたことから、ここでは京都中心の蒐集と考える)

吉川コレクションと芹沢コレクション被衣資料の比較・考察


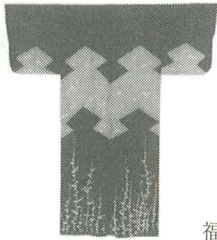
御所被衣

	吉川コレクション	芹沢コレクション
点 数	7 点	1 点
地 色	共通：紺もしくは黒	
文様構成	共通：胴抜き 松皮菱段（連続）散らし文様あり 松皮菱段は白・濃紺・藍の3色連続 段部に散らし丸文（竹梅・紅葉・萩・牡丹・桔梗）散らし紅葉文	段部に散らし丸文（菖蒲・若松）
素 材	絹地（絹）	絹地（絹）
技 法	型染	型染
襟肩下り	ほぼすべてあり（一部記載なし）	すべてにあり
付 属	肩あて、襟あての両方、もしくは片方がついている 一部腰紐付き	裏に肩あて・襟あてがついている
	 ↑腰紐	 福祉大所蔵
考 察	御所勤めもしくは上流の婦女子が用いたことから御所被衣といわれ、すべての被衣に絹地が使われている。襟肩下りがほぼすべてに確認できたことより、御所被衣は襟の改良が行われた江戸中期以降に用いられた被衣であることが推測される。また肩あて、襟あてには紅絹や黒絹子が用いられている。また紐付きの御所被衣は吉川コレクションのみに見られたことから、京都独自の仕立てとも考えられる。	

町被衣

	吉川コレクション	芹沢コレクション
点 数	12 点	4 点
地 色	共通：藍染による紺もしくは黒（肩・裾部分）	
文様構成	共通：胴抜き（熨斗目） 胴抜き部分の地色は水色・薄茶色山水、草花 文様の描絵あり（一部友禅）	胴抜き部分の地色は水色・薄黄色・薄茶色山水、 楼閣山水の描絵あり
素 材	絹・麻	絹・絹・麻
技 法	描絵 一部友禅染	墨描絵
襟肩下り	すべてにあり	すべてにあり
付 属	肩あて、襟あての両方、もしくはどちらか片方がついている	一部肩あて、襟あてのどちらかがついている
	 (部分)	 福祉大所蔵
考 察	地色が紺、黒以外の町被衣はこれまでの調査資料の中に存在しない。胴抜きを区切る境界線はほぼすべて直線であるが、一部雲形、霞形、州浜形取りなど見られる。珍しいものとして花に兎取りが吉川コレクションに存在する。 胴抜き部分は水色、納戸色という青系統の色が主であるが、他の薄茶、薄黄、白抜きとすべて淡色が肩裾の地色と組み合わせられる。 絹地の町被衣に友禅染の手法がみられ、京都特有の資料とも考えられる。	


布被衣

	吉川コレクション	芹沢コレクション
点 数	1点(※)	4点(※)
地 色	共通：藍染による紺もしくは黒（肩・裾部分） 共通：胴抜き部分と肩もしくは裾に簡描で文様	
文様構成	町被衣の構成に、肩裾部分に簡描で文様を描いている。(※)	文様は手描き(簡描もしくは墨による描繪) 裾部には簡描で蕨文様を描いているものが多く見られる。他に梅花・扇・流水に松文様がある
素 材	麻	苧麻・麻
技 法	型染・簡描	型染・簡描か墨描繪
襟肩下り	記録なし	一部あり
付 属	なし	なし
素 材		 福祉大所蔵
考 察	※吉川コレクションの布被衣は1点しか分類されていないため、吉川コレクションの布被衣を比較し特徴を見ることができなかった。よって芹沢、他館の被衣はその1点の特徴を元に、芹沢コレクションの中から4点布被衣と判断し分類した。	

大紋被衣

	吉川コレクション	芹沢コレクション
点 数	15点	11点
地 色	共通：藍染による紺もしくは黒（肩・裾部分）	
文様構成	被った時に頭が当たる部分には大紋、裾に文様が簡描もしくは描繪で描かれている裾を除く身頃は型染で数段に染め分けられ、裾に簡描で文様が描かれる。 大紋は菊紋が多く見られる。他に桐や梅、桔梗などがある。染分けの段は2段もののから5段のものまである。	大紋の最多は菊紋。他に山桜、酢漿草、桔梗、梅、桐、唐花、八重桔梗、八重梅など花の紋が中心で、雲形、違い羽、菱紋もみられる。裾部分は松皮菱、山形、雲取りで仕切られ、簡描か描繪で文様が描かれる。蕨の文様が多く見られるが、他に梅に忍草、桐、楓葉。桜や唐草など描かれたものもある。
素 材	麻	苧麻(麻)・絹地
技 法	簡描・型染の併用	簡描・型染の併用
襟肩下り	ほぼすべてにあり	ほぼすべてにあり
付 属	記録なし	一部に襟あてあり
考 察	頭のアたる位置に大紋、肩から腰まで藍による型染、裾が黒地に簡描という独特な意匠構成は、襟肩下りの仕立てになっても被衣と判断でき、「庄内被衣」の代表的な意匠ともいえる。素材はほぼ苧麻(麻)地が使われており、一部絹地が見られる。吉川は大紋が入っているものすべてを大紋被衣という分類にまとめたが、この資料データからさらに3種に分類できると思われる。これらを大紋被衣A・B・Cとし特徴をあげる。(別表 大紋被衣 参照)	

別表 大紋被衣

	大紋被衣 A	大紋被衣 B	大紋被衣 C
文様構成	共通：染分け部分は藍染による紺，裾は黒地。被った時に頭が当たる部分には大紋，裾に文様が簡描もしくは描繪で描かれている		
特 徴	肩から裾までは小紋(もしくは中形)を型染で染分け，裾は簡描で文様が描かれている。染分けは3〜5段(裾も含む)とあるが，4段が最も多く見られる。型の多用により繊細さをもつ。	2段の文様構成。肩から裾まで同地色，もしくは同地紋(花菱・木瓜紋など)裾等の簡描の文様(蕨・梅花など)は大柄。また大胆な配置。	大紋 A と B と特徴をもつ。小紋の染分けの間に簡描の文様を入れたもの，裾の簡描部分が2段に分かれている変則的な文様構成で斬新。
			
	福祉大所蔵	福祉大所蔵	

※『日本風俗資料』に掲載されている被衣資料の計測データが一部ない為，比較できない部分もある表の写真に所蔵の記載がないものは全て吉川コレクション⁴⁸⁾である

前章に1750年頃より用いられた被衣の襟の仕立てに特徴があると記したが³⁾，被衣資料の比較・考察の表では「襟肩下り」の欄でその特徴の有無を記載した。本来，襟は肩の位置に合わせて仕立ててあるが，被衣には前身ごろ側の下げた位置に襟が付けられているものもある[図7]。肩から襟の位置の長さを襟肩下りとし，被衣によってその長さは異なる。

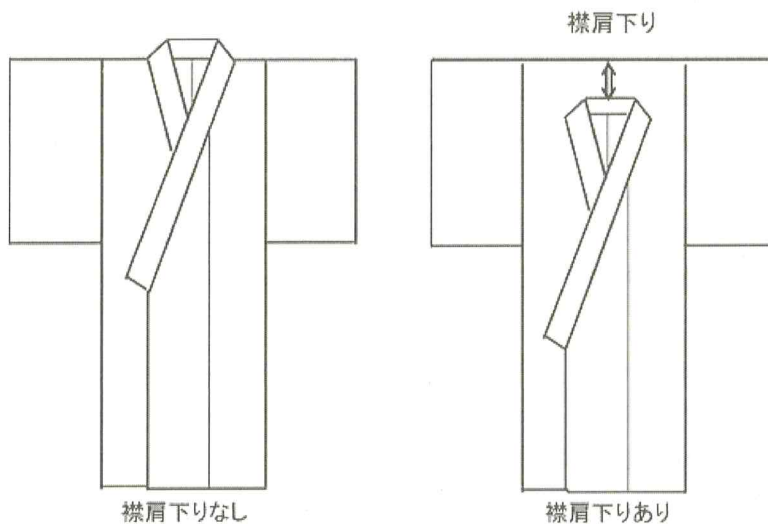


図7

吉川コレクションの中には上記のほかに「祝儀被衣」という分類がある。これは「小供被衣」「祝儀被衣」の2種類に分けられるが、東北の染織文化にかかわる資料と異なるため、紹介だけにとどめる。

「小供被衣」：子供用で小さく作られている。主に京都で行われていた「被衣初め」⁴⁹⁾と呼ばれる5歳女兒のお祝いに用いる被衣。吉川コレクションの小供被衣は7点あるが、御所被衣と町被衣が数点ずつあり、その仕立ては襟肩下りで振袖であった。

「婚礼儀式用被衣」：婚儀で新婦が用いた被衣。襟肩下り・振袖仕立てで、白地に織り文様と白絵入りの2点が吉川コレクションとして2点紹介されている。

4. 芹沢コレクションの被衣

芹沢銈介の被衣コレクションは、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に14点、静岡市立芹沢銈介美術館に10点収蔵されている。その文様、寸法データを紹介する。[表1]

・芹沢コレクション24点

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵(銈介収集4点・長介収集10点)14点

※ 表1の所蔵欄「福」と表記

静岡市立芹沢銈介美術館所蔵10点

※ 表1の所蔵欄「静」と表記

- ・分類は「御所被衣」,「町被衣」,「布被衣」,「大紋被衣A・B・C」の6分類としたが、これらに分類できない被衣があるため、ここではさらに「その他」という分類を設けた。「その他」の特徴は3点のうち2点が型染によって全体が同じ文様で染められている点があげられる。
 - ・材質は主に苧麻地10点、麻地8点と麻素材を用いた布地が多く見られる。絹地や絹地といった絹素材のものは4点(うち絹地は3点)と割合少なく、木綿にいたっては2点しかない。
 - ・文様分類で見ると御所被衣が1点、町被衣が4点、布被衣が4点、大紋被衣12点(うち大紋Aが5点、Bが6点、Cが1点)、その他が3点と分けられ、文様からすぐ被衣と判断できる大紋被衣が多く見られる。
 - ・付属は一部の被衣に襟あてや肩あてが付けられているが、素材は紅絹が多く見られる。被った際に裏地の赤い布地が見えるおしゃれと、補強や汚れよけという実用性が備わった仕立てとなっている。
 - ・襟の仕立てが前身頃に付けられ、被りやすい仕立てになっているものは17点。ほぼすべてに襟肩下りがある。その下げた長さは4センチから12.5センチと被衣によって大きく異なる。
- ※ 本来、被衣は文様構成や襟肩下りの仕立てによって被衣と判断される。芹沢コレクションの中で「その他」に分類した、文様分類に入らないもの、襟肩下りがみられない被衣については収集者が被衣と判断したものである。

5. 終 わ り に

「かづき」は福島、山形、秋田、岩手地方で用いられた特色ある衣類の一種で、祝いの時、弔いとき頭に被ふ。多くは麻地であるが、絹の見出せる。是に大柄の様々な模様が入る。或は型、或は筒描き、大柄小柄、小紋や友禅模様の等様々作る。北日本で発達した最も重要な染織品として注意される日はまもなく来るであろう。⁵⁰⁾と柳は述べている。

型染と筒描の技法を備えた藍染の被衣は、染色技術だけでなく、文様の配置にも目を奪われる日本染織史上優れた資料である。吉川や柳、芹沢はその被衣を保管し、後世に残すべきものと認めたことにより、これだけのコレクションを残したものと考ええる。

現在、室町から江戸初期にかけて用いられた、辻が花染と呼ばれる染色技法を施した着物が、主に武将の遺品として現存し、日本の代表的染織資料として高い評価を受けて保管・展示されている。一方、被衣の存在は紹介されることも少なく、公の博物館施設等で主に収蔵、展示されているのは御所被衣だけという現状がある。画一的な染色技法である辻が花染衣裳と比べても、型染と筒描の併用という技術やその斬新な文様構成をもつ町被衣、布被衣、大紋被衣は決して劣ることはないと考える。現存資料の制作使用年代の時代的な差や美しさの質の違いはあるが、どちらも高い染色技術と品格を持つ資料である。辻が花染の資料同様、被衣も今後調査・保存活動を進めていくべきものであろう。

着物を被るという風習は、今回の調査では一部の地域だけであったが、歴史の流れからみても、全国各地で行われていたものと考えられる。しかし、その中で「庄内被衣」と呼ばれる藍染の被衣が用いられた地域の特定は難しい。「以前は保管していたが、建てかえを期に蔵を取り壊す際、虫食いの穴や汚れがあったから処分してしまった」という話を聞くと、調査がもう少し早く行われていれば、より多くの被衣資料が残ったのではないかと悔やまれる。だからこそ、今後は早急に各地の被衣使用状況など多くの情報を得る必要がある。

今回は芹沢コレクションの被衣を中心にデータを紹介したが、今後は吉川コレクションを収蔵する奈良県立美術館、日本民藝館、国立歴史民俗博物館等の被衣を収蔵する施設での被衣資料のデータ採取と情報収集、被衣使用地における染色業(紺屋)調査などを進めていきたいと思う。また引き続き、文献や絵画資料からより詳細に被衣の存在を確認し、現存資料との対比ができるれば、絵巻や近世風俗画、浮世絵などに描かれている被衣の形態や着こなしによって、現存する被衣の制作時代を計ることも可能になるだろう。

「京の染織文化を受容した東北の人々が、風土の異なる地で展開させ、東北の染織文化の独自性を得ることができたのか」という大きなテーマを外枠に置き、被衣の全体像を把握した上で、被衣に見られる蔵や菊という多用されたモチーフに込められた意味、京都と庄内の被衣の素材や文様構成の違いなどから東北染織文化の地域性を探ろうと思う。

注

- 1) 岡村吉右衛門「被衣(かづき)」『民藝』, 394号, 日本民藝館, 1985
- 2) 犬塚幹士(平成9年当時致道博物館副館長・現常務理事)によると, 正確には「ぎ」はガ行鼻音で発音するという。ガ行鼻音とはガ・ギ・グ・ゲ・ゴと表記「カツギ」(日本放送協会『日本語アクセント辞典』, 日本放送協会, 1985)
- 3) 岡村, 前掲, 1)
- 4) 柳宗悦『柳宗悦全集』第21巻中, 筑摩書房, 1989, P. 127, 135, 138
濱田淑子「東北地方の被衣」(講演レジュメ)
- 5) この桌の垂衣が作られた背景には, これまで市女笠を用いて旅に出ている女性たちが砂や埃といった粉塵に悩まされていた点があげられる。
- 6) 一般と中流階級の用いた桌の垂衣の違いは, 飾りの有無で見分けられる。布の一幅ごとに装飾し, あげ巻き結びや紐を垂らしているものは身分の高い女性のものとされた。
- 7) 国宝「扇面法華経冊子」(四天王寺所蔵): 永井信一『日本古寺美術全集 第七巻 四天王寺と河内の古寺』, 集英社, 1981, no. 9 [図1]
- 8) 辻惟雄『日本美術史年表』, 美術出版社, 2002, p. 56
- 9) 「鳥獣人物戯画」(高山寺所蔵)に狐が着物を被っている姿が描かれているのを見ることが出来る。この作品の制作年代は4巻のうち甲, 乙が平安時代, 丙, 丁は鎌倉時代と分かれており, 狐が描かれているのは甲巻である(若杉準治『美術館に行こう 絵巻を読み解く』, 新潮社, 1998, p. 28)。辻は「扇面法華経冊子」と「鳥獣人物戯画」甲巻の制作年代を同じ12世紀中頃としている(辻惟雄『日本美術の歴史』, 東京大学出版会, 2005, p. 147, 145)。しかし『鳥獣人物戯画』において制作以後に場面の継ぎが行われたという説(小松茂美「解説 鳥獣人物戯画」『日本絵巻大成6 鳥獣人物戯画』, 中央公論社, 1977)もあるため制作年代が曖昧な点がみられる。そのためここでは現存する被衣姿が描かれる最古の資料を「扇面法華経冊子」下絵とした。
- 10) 袷は広袖と, 襟・袖・裾まわしで裏を少し出し, 襲色目の美しい色彩を見せている点の特徴である。
- 11) 「年中行事絵巻」(住吉家模本 田村家所蔵): 小松茂美『年中行事絵巻』, 中央公論社, 1977, p. 20
- 12) 源氏物語: 柳井滋ほか『新日本古典文学大系 19 源氏物語』, 岩波書店, 1993, p. 295
- 13) 枕草子(能因本): 松井聰他『枕草子 日本古典全集 11』, 小学館, 1974, p. 462
- 14) 文学年表(市古貞次『日本文学大年表』, 桜楓社, 1986)によると成立が建保2年以降正平3(1348)年の間に成立とある
- 15) 「かわらけいろ」とは土器色と書き, 明るい赤みがかった茶色をさす。ただし着物の色の形容に用いられる場合, 布地が古びて茶色になったことを意味することもあるという(福田邦夫『日本の伝統色 色の小辞典』, 読売新聞社, 1987 初版)。この歌から, かわらけ色の被衣があった説と, 被衣には使い古されて古びた着物を用いていたという説の2通りの解釈が出来るが, 時代背景から当時は中流階級以上の女性が被衣を用いたと考察されるため, 後者は考えにくい。
- 16) 塙保己一『群書類従』第28集 雑部, 続群書類従完成会, 1949 改訂3版
- 17) 喜多村筠庭『存採叢書 嬉遊笑覧』(上), 近藤活版所, 1830, p. 223
- 18) 「住吉物語絵巻」(静嘉堂本上巻) 13世紀後半: 小松茂美『日本絵巻大成 19 住吉物語絵巻 小野雪見御幸絵巻』, 中央公論社, 1978, p. 3
- 19) 「一遍上人絵伝」1299: 清浄光寺所蔵 [図2]
- 20) 板倉寿郎他『原色染織大辞典』, 淡交社, 1979
- 21) その理由として「武士階級が興り, 庶民出身の武士階級の地位が高まるにつれて, 小袖系の衣服も權威を増し, 固有の服装としての地位を占めるように至ったため」²²⁾と述べられている。
- 22) 井筒雅風『原色日本服飾史』, 光琳社出版, 1989

- 23) 土佐光茂『桑実寺縁起』1533: 小松茂美『続日本絵巻大成 13 桑実寺縁起 道明寺縁起』, 中央公論社, 1982, p. 26-29
- 24) 「月次風俗図」中世末期: 武田恒夫他『日本屏風絵集成 第9巻 景物画 四季景物』, 講談社, 1977, p. 59-60 no. 36, 37
- 25) 村田孝子「江戸時代の髪型」『装いの文化史—江戸の女たちの流行通信—』, ポーラ研究所, 1991, p. 14
- 26) 黒川真道『日本風俗図絵 11』, 柏書房, 1983
- 27) 神宮司廳『古事類苑 43 服飾部』, 吉川弘文館, 1910, p. 882
- 28) 斉藤彦麿「神代余波」(1847年)では「浪士岩間八三郎といふ者被衣著て女の姿と成て松平豆州候をうかがひしに事露顯に及び八三郎は誅はれて江戸中被衣御停止となれり…」(市島謙吉『燕石十種 第二』, 国書刊行会, 1907, p. 66-67)とある。森山孝盛「賤のをだ巻」(1802年)には「増上寺にて間門三郎と云もの, 女の真似をして, かづきをかぶり聴衆にまじり, 松平伊豆守ねらひけるより御停止に成たり」(日本随筆大成編集部『日本随筆大成<第3期>4』, 吉川弘文館, 1977, p. 239)と記し, 著者未詳「関秘録」では「被^{カフキ}, 江戸にても有し事なり。昔岩間八三郎と云十八才の浪人有て, 松平伊豆守殿をねらひ, 女に成かつぎを着しゆへ, 夫より関東法度也」(日本随筆大成編集部『日本随筆大成<第3期>10』, 吉川弘文館, 1977, p. 126)と記している。
- 29) 日本随筆大成編集部『日本随筆大成<第3期>4』, 吉川弘文館, 1977, p. 148
- 30) この時期被衣禁止令が出されたといわれているが, 事件史年表(遠藤元男『近世生活史年表』, 雄山閣出版株式会社, 1989)では禁止令を確認できず
- 31) 江戸時代の婦女子が用いた被り物の一種。これは中世上流婦女子が用いた小袖被衣から変化したものと思われる。(中略)近世になり女髷が結われるようになると髷の塵除けとして真綿を木型で伸ばし, 髷に掛けて使用するようになり, 嫁入りの際文金高島田の髷と花嫁の顔を隠す形式に変化した³²⁾。
- 32) 板倉, 前掲, 20)
- 33) 明治以後は婚礼時に用い, 現在は角隠しとよばれる
- 34) 長沢芦雪「東山名所図」: 武田恒夫『日本屏風絵集成 第10巻 景物画 名所景物』, 講談社, 1980, p. 32
- 35) 杉本於安「酒田の服飾」『酒田市史改訂版 別巻』, 酒田市, 1989, p. 28-29
- 36) 民俗学研究所『改訂総合日本民俗語彙 第1巻』, 平凡社, 1970
- 37) 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典 中』, 沖縄タイムス社, 1983, p. 465
- 38) 坂本万七『坂本万七遺作写真集 沖縄・昭和11年代』, 新星図書出版, 1983
- 39) 宮良高広『野辺地の社会と民俗』, 青森県上北郡野辺地町 北海道みんぞく文化研究会 1990
- 40) 青森県史編さん近現代部会『青森県史 資料編 近現代1』, 青森県, 2002
- 41) 1671(寛文11)~1750(寛永3年)江戸中期に活躍した京都の浮世絵師。優麗な肉筆美人画にも優れ, 上方浮世絵界の第一人者
- 42) 西川祐信「宮詣図」: ハロルド・P・スターン他『浮世絵聚花 フリーア美術館』, 小学館, 1981, p. 66
- 43) 1752(宝暦2)~1815(文化12)年江戸中・後期に活躍した浮世絵師
- 44) 鈴木春信「雨」: 後藤茂樹『浮世絵大系2 春信』, 集英社, 1973, no. 5
図5の上記作品について集英社に確認したところ, 所蔵者と撮影者は不明と回答がありました。この写真の著作権者の方は東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館までご連絡下さい。
- 45) 吉川は1894年京都に生れ, 6, 7歳の頃から書画に親しみ, 20歳の頃京都市立絵画専門学校予科に入学, 画家への道を志す。しかしそこで日本古来の風俗を学ぶ講座を持っていた江馬務と出会い, 有職故実, 服飾文化への興味を持つ。15歳頃からすでに浮世絵の収集を始めていた吉川は, 特に京都の江戸時代女性風俗資料に関心を寄せ, 1979年に85歳で亡くなるまで, 膨大なコレクションとそれに関わる書籍を書き残した⁴⁶⁾。

- 46) 藤本恵子「吉川観方と京都文化」『京都文化博物館特別展 日本最大級の風俗収集品 吉川観方と京都文化』, 京都文化博物館, 2002
- 47) 吉川観方『日本風俗資料 被衣編』, マリア書房, 1936
- 48) 吉川, 同上 (転載)
- 49) 京都で行われていた健やかな子供の成長を願いお参りを行う風習。現在の七五三の前身。
- 50) 柳宗悦「寄付報告」『工芸』, 日本民藝協会, 1938, p. 72